

漢文訓読史上の問題 (七)

——「名ヲバ……トイフ」というよみかたについて——

門 前 正 彦

〔要 旨〕

漢訳仏典の「名ー」・「号ー」の文を訓読する場合に、現在の訓読法では下から上へ単純に返読して「ト名ヅク」・「トト号ス」とよんでいる。

しかし、平安時代初期の西大寺本金光明最勝王經白点・立本寺本妙法蓮華經明論点等の用例を調査すると、これらの文を現在の訓読とはちがって「名ヲバートイフ」と反覆してよむ傾向が見られる。これは、「トー」等の文を「イハクートイフ」とよむのとまったく同じであることに気付く。要するに、「名ー」等の文を平安時代初期の訓読では「名ヲバートイフ」とよんでいたのが、後期ころから「ト名ヅク」とよむようになったことが判る。

さて、右のような訓読をする理由としては、次の二つの問題が考えられる。第一には、「名ー」と似ている漢文の書きかたの影響である。漢訳仏典には、「名目」・「名目ー」・「名爲ー」のような書きかたがしきりに用いられているが、これに「名ヲバートイフ」という反覆形のよみかたが結びついてしまつて、それが今、問題にしている「名ー」の文をよむ場合にも、表われたものと見られよう。第二には、不必要な誤解を防ぐためである。初期の訓読文は、はなしことは、面的な一面もあったと思われるが、現在の訓読のように「ト名ヅク」と補語をつらねて下から返読すると、補語が長大なことの多い漢訳仏典の場合、文意が非常に判りにくく、意味をとりちがえる恐れが多分にある。右のような危険をさける

ために、最初に「名ヲバ」とよんで補語のくることを予想させ、仏の名号をつらね、終りに「トイフ」をよみそえて文意を明瞭ならしめたのであろう。

ところが、時代が下ると、初期点本における意識的な訓法がすたれ、直訳的によまれるようになった。その結果、「名ー」の文は下から上に返読されるだけの訓法になってしまったのである。

(一) はじめに

一見、何の変化もなさそうに見える漢文訓読文も、最近研究の著しく進んだ平安時代初期の訓点語の奥態が明らかにされるにつれて、色々な問題をふくんでいることが判ってきた。訓読語も時代によって相当な差異があるが、それでは、どのような事項がどのような理由で変化していったかという個々の具体的な問題の調査になると、未開拓の分野がかなりあるように思う。私もこの問題に関してはこれまでいくつかをとりあげて、私なりの考えをのべてきた^{註1}。本稿でもその一例と

して、「名ー」という文の訓法について調査し考えてみよう。断片的な事象とみえるかもしれないが、訓読語の変遷の全般に大いに関係があり、これについてはまた別の機会にまとめてくわしくのべる予定でいる。本稿はその基礎作業の一部である。

平安時代初期の訓読文では、文中に対話または思惟つまり直接引用ーがある場合、「イハクートイフ」・「ナマハクートノタマフ」・「マラサクートマラス」・「思惟スラクートオモフ」・「念ヲナサクトオモフ」等の訓読の型があり、これについては従来先学によって指摘されてきたとおりである^{註2}。春日政治博士の「西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究」から例を引くと、

(い) 婆羅門の言(は)ク、「善哉童子、此の金光明は甚深なり、最上なり、……明行足に従(ひ)たてまつりて、斯の一の願を求(む)ルこと能(は)ざらむ(不)」といふ。

婆羅門言善哉童子此金光明甚深最上……不能為我從明行足求斯一願

(2) 佛具壽阿難陀に告はく、「汝〔於〕此の樹の下に我が爲に座敷ク可し」とのたまふ。

時に阿難陀教を受へけて敷キヌ〔乙〕。自言「世尊、其の座は敷キヌ〔訖〕」。唯ル聖時を知〔ら〕せ」とまをす。

佛告具壽阿難陀汝可於此樹下爲我敷座時阿難陀受教敷已自言世尊其座敷訖唯聖知時

(3) 亦復思惟すラク、「釋迦牟尼如來は……唯〔於〕壽命のみに、疑惑の心を生ス」とオモフ。

亦復思惟釋迦牟尼如來……唯於壽命生疑惑

(4) 復是の念を作〔さ〕ク、「佛の所説の如し。……況〔や〕餘の飲食をは」とオモフ

復作是念如佛所説……況餘飲食

以上のような例がある。

右の例とほぼ似かよったものとして、私が最近気づいたものに、漢文の「名ー」等を訓詁する場合に「名ヲバ……トイフ」・「名ツケテ……トイフ」という一連の訓詁の型（反覆形）があるように思う。いま、このよう

な訓詁の型（反覆形）を中心にして若干の考察を試みよう。本稿で解明しようとする点は、

① 平安時代初期における「名ー」というような文の訓詁の更態。

② 平安時代中期以降における「名ー」の訓詁の変化およびその理由。

である。

(二) 現在の訓法

漢訳仏典では、主として仏の名等を記す場合に、「名ー」・「号ー」という書きかたをする。このような文を現在

の妙法蓮華經の訓詁法では次のようによんでいる。^{註3}

(5) 諸の菩薩の爲に大衆經の無量教・教菩薩法・佛所護念

と名くるを説きたもう。

39 ペ

爲諸菩薩説大衆經名無量教教菩薩法佛所護念

(6) 爾の時に佛います、日月燈明如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛。

世尊と號く。

47 ペ

爾時佛號日月燈明如來應供正徧知明行足善逝世間解
無上士調御丈夫天人師佛世尊

(7) 佛人中尊有しき日月燈明と號く。

52 ペ

有佛人中尊 号日月燈明

(8) 時に佛大衆經の無量義と名くるを説いて……

52 ペ

時佛説大衆 經名無量義

(9) 跏趺して三昧に坐したもう無量義處と名く。

52 ペ

跏趺座三昧 名無量義處

(10) 意樂國に於て作佛することを得 多摩羅 梅檀の香と

號けん。

51 ペ

於意樂國而得作佛号多摩羅梅檀之香

(11) 而も彼の象の中に一りの大梵天王あり、救一切と名く。

而彼象中有一大梵天王名救一切

58 ペ

(12) 乃ち四象の中に於て是の大衆經の妙法蓮華・教菩薩法。

佛所護念と名くるを説きたもう。

171 ペ

乃於四象之中説是大衆經名妙法蓮華教菩薩法佛所護念
(13) 爾の時に菩薩摩訶薩あり、大衆説と名く。

214 ペ

爾時佛菩薩摩訶薩名大衆説

(14) 此に菩薩あり、文殊師利と名く。

229 ペ

此有菩薩名文殊師利

(15) 一切衆生喜見如來・應供・正徧知・明行足・善逝・

世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號けん。
号一切衆生喜見如來應供正徧知明行足善逝世間解無上
士調御丈夫天人師佛世尊

236 ペ

(16) 亦威音王如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解

無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號けたてまつ
る。

319 ペ

亦号威音王如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調

御丈夫天人師佛世尊

(17) 爾の時に一りの菩薩比丘あり、常不輕と名く。 349 ペ

爾時有一菩薩比丘名常不輕

(18) 乃往過去無量恒河沙劫に佛いましき、日月淨明德如來。 350 ペ

應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛・世尊と號けたてまつる。 351 ペ

乃往過去無量恒河沙劫有佛号日月淨明德如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊

(19) 是の數を過ぎ已つて世界あり、淨光莊嚴と名く。 352 ペ

過是數已有世界名淨光莊嚴

(20) 其の國に佛います。淨華宿王智如來・應供・正徧知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師。 353 ペ

佛・世尊と號けたてまつる。 354 ペ

其國有佛号淨華宿王智如來應供正徧知明行足善逝世間

解無上士調御丈夫天人師佛世尊

(21) 過去に佛いましき、雲雷音王・多陀阿伽度・阿羅訶。 355 ペ

三藐三佛陀と名けたてまつる。

過去有佛名雲雷音王多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀

以上の例によって判るように、「名」・「号」等の字の文は必ず下から上に返読して「名」・「号」等の字を動詞によむという訓詁法である。

(三) 平安時代初期の訓法

この「名」字の問題に關しても、今までにのべたことのあるいくつかの問題と同様に、平安時代初期の訓詁のやりかたは、現在の漢文訓詁とは大いに異なっているように思われる。初期の訓点本で、「名」・「号」の例の訓法を調査してみよう。

まず、平安時代初期点本の代表として西大寺本金光明最勝王經において、「名」・「号」字を用いており、しかもそれを下から上へ「ト名ヅク」と單純に返読し

ていない例をさがしてみると、次のような例が見出される。^{註5}

(22) 此の福寶光明女、〔於〕未來の世に、當に佛と作ルこと得む。号をば釋迦牟尼といはむ。如來應正遍知明行

足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊といはむ。⁵⁴

此福寶光明女於未來世當得作佛号釋迦牟尼如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊

(23) 是の如意寶光耀は、〔於〕未來の世に、當に佛と作ルこと得む。号をば寶欲吉祥藏といはむ。如來應正遍知

明行圓滿善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊（といはむ）。⁹⁴ ペ

是如意寶光耀於未來世當得作佛号寶欲吉祥藏如來應正

遍知明行圓滿善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊

(24) 今法門有り、名をば無染著施羅尼といふ。¹²² ペ

今有法門名無染著施羅尼

(25) 汝等知ル當レ、有す施羅尼を名（づけ）て如意寶珠といふ。¹⁶⁴ ペ

汝等當知有施羅尼名如意寶珠

(26) 世尊、北方に辟闍羅末拏天王の城あり、名をば有財といふ。¹⁷²

世尊北方辟闍羅末拏天城名有財

(27) 王の法たる正論有す、名をば天主教法といふ。¹⁵⁸ ペ

有王法正論名天主教法

(28) 又は〔於〕過去の難思の劫に、正遍知有しき、名は寶誓とまをしき。¹⁶⁴ ペ

又於過去難思劫有正遍知名寶誓

(29) 夜ル夢に佛の福智説（き）たまふを聞キ、〔見有〕法師名は寶積といふが、座に處して端嚴なること日輪の

如（く）して、金光の微妙の典を頒べ説ク有（り）と見キ。¹⁶⁴ ペ

夜夢聞説佛福智見有法師名寶積處座端嚴如日輪

演説金光微妙典

頗シ〔有〕法師の名は寶積といふが、功德成就して衆

生を化する有リヤ。¹⁶⁴ ペ

頗有法師名寶積功德成就化衆生

(31) 當に阿耨多羅三藐三菩提成らむ。号をば金寶山王とい

ふ。

はむ。如來應正遍知明行足善逝世間解無上士調御丈夫
天人師佛世尊といはむ。
172 ペ

當成阿耨多羅三藐三菩提号金寶山王如來應正遍知明行
足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊

(32) 世界をば尔時には轉して名(づけ)て淨幢といはむ。

世界尔時轉名淨幢

172 ペ

(33) 善女天、時に長若子の妻ありキ、名をば水屑藏といひ
キ。
178 ペ

善女天時長若子妻名水屑藏

以上の例によって明らかなように、「名ー」、「号ー」
というような文を「名ヲバートイフ」とよんでいる。

つまり、最初に「名」字を「名ヲバ」とよみ、仏の名等
をつらね、最後に「トイフ」をよみそえているのである。

これは、「曰ー」という文を「イハクートイフ」と
よんでいるのとくらべてみた場合、両者ともに全く同じ
性質のものと見ることができよう。

右のような「名ヲバートイフ」というよみかたを、

さらに他の初期点本からさがすと、以下の地藏十輪經元

慶七年点の例を追加することができる。^{註6}

(34) 象会の中に、天帝釈有り。名は無垢生といふ。

於象会中有天帝釈名无垢生

(35) 善男子、乃^{イニハ}往^{オウシ}過去迦魯國の王有(レ)キ。名を梵授
(と)いひき。旃茶羅に勅したまひキ。大象王有り。

名は青蓮目(と)いふ。

善男子乃往過去有迦魯國王名梵授。勅旃茶羅。有大象

王名青蓮目

(36) 尔(の)時(に)象の中に菩薩摩訶薩有(リ)。名は好
疑門といふ。

疑門といふ。

尔時象中有菩薩摩訶薩名好疑門

(37) 尔の時(に)復、大羅刹(の)母有(リ)。名を擊擊^{ガウ}
髪といふ。

髪といふ。

尔時復有大羅刹母。名擊擊髮。

(38) 尔(の)時(に)復、大羅刹(の)母有(リ)。名は
刀劍口(と)いふ。

刀劍口(と)いふ。

尔時復有大羅刹母名刀劍口。(以上十輪經)

(四) 訓法の変化

さて、「名」^ナという文を古くは「名ヲバートイフ」とよんでいる事實は、さらに立本寺妙法蓮華經の例を調査することによって、はつきりと裏付けされるように思う。以前にも述べたように、立本寺本法華經は全巻にわたって白点で平安時代後期の珣照聖人の訓がほとんどこしてあり、これとよみかたが特に異なる部分にかぎって、朱で平安初期の明詮僧都の訓をつけたものである。したがって、立本寺法華經において朱と白の二種の訓点がついている部分は、平安時代初期の明詮僧都の訓と後期の珣照聖人のそれとに差異があったことになり、これは時代による訓読の変化を端的に表わしていることとがでさう。その例としては次のような諸例がある。(以下に示す例は、最初が平安時代後期の珣照聖人の白点の訓読文で、次が初期の明詮僧都の朱点の訓読文である。なお、これの原漢文は、前出の例(5)から(2)までがこれに相当する。)

(39) 諸の菩薩の爲に大衆經の無量義教菩薩法佛所護念と

名ルを説(き)タマヒキ。

○諸(の)菩薩(の)爲(に)大衆經を説(きたまひ)キ。名をは無量義とも教菩薩法とも佛所護念ともマウス。

(40) 余の時に佛有^イシキ 日月燈明と号^ケキ 如來とも應

供とも正徧知とも明行足とも善逝とも世間解とも無上士調御丈夫とも天人師とも佛世尊ともマウシキ

○余(の)時(に)佛有(しき)号をは日月燈明トマウシキ 如來(とも)應供(とも)正徧知(とも)明

行足(とも)善逝(とも)世間解(とも)無上士調御丈夫(とも)天人師(とも)佛世尊トモ

(41) 佛人中の尊有^イシキ 日月燈明と号(し)タマツリキ

○佛人中(の)尊有(しき)号をは日月燈明トマウシキ

(42) 時に佛大衆經の無量義と名るを説(き)タマヒテ

○時(に)佛大衆經 名は無量義トマウスを説(きたまひて)

(43) 〇 跌を蹴て三昧の無量義處と名クルに座(し)タマヒ
キ

〇 跌を蹴て三昧 名は無量義處トイフニ座(したまひ
キ)

(44) 〇 意衆國にして而も佛と作(る)こと得む 多摩羅梅
檀(の)香と号(せ)む

〇 意衆國(にして)而(も)佛(と)作(る)こと得
(む) 号をば多摩羅梅檀(の)香トイハム

(45) 〇 而も彼の衆の中に一の大梵天王有りき 故一切と名
フ

〇 而(も)彼(の)衆(の)中(に)一(の)大梵天
王有(リキ) 名をば故一切(と)イヒキ

(46) 〇 乃し四衆の中にして是の大衆經の妙法蓮華教菩薩云
佛所護念と名クルを説(き)タマヒキ

〇 乃(し)四衆(の)中(にして)是の大衆經(を)
説(きたまひき) 名をば妙法蓮華とも教菩薩法とも佛
所護念(と)も申(ま)

(47) 〇 今時菩薩摩訶薩有リ、大衆説と名ク

〇 今時菩薩摩訶薩有(リ) 名をば大衆説(といひ)キ
(48) 〇 此ニ菩薩有リ、文殊師利と名ク

〇 此(に)菩薩有(リ) 名をば文殊師利トイフ

(49) 〇 一切衆生喜見如來應供正徧知明行足善逝世間解無上
士調御丈夫夫人師佛世尊と号せむ。

〇 号をば一切衆生喜見トイハム 如來應供正徧知明行

足善逝世間解無上士調御丈夫夫人師佛世尊(といひむ)

(50) 〇 亦威音王如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調
御丈夫夫人師佛世尊と号けき

〇 亦号をば威音王ト申キ、如來應供正徧知明行足善逝

世間解無上士調御丈夫夫人師佛世尊

(51) 〇 余の時に一の菩薩の比丘有りき、常不輕(と)名け
キ

〇 今時一(の)菩薩(の)比丘有(リキ) 名をば常不
輕トイヒキ

(52) 〇 乃往過去無量恒河沙の劫に佛有シキ 日月淨明徧如
來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫夫人師

佛世尊と号けタマツリキ

○ 乃往過去無量恒阿沙（の）劫（に）佛有（しき）号
 をは日月淨明德ト申キ、如來應供正徧知明行足善逝世
 間解無上士調御丈夫天人師佛世尊（と）も

(53) ○ 是の數を過ぎ已（て）世界有り 淨光莊嚴と名ク

○ 是（の）數（を）過（ぎ）已（て）世界有（リ）、
 名をば淨光莊嚴トイフ

(54) ○ 其の國に佛有ス、淨華嚴王智如來應供正徧知明行足
 善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と号ク

○ 其（の）國（に）佛有（す）、号をば淨華嚴王智ト申
 （キ）如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈

夫天人師佛世尊（と）も

(55) ○ 過去に佛有シキ 雲電音王多陀阿伽度阿羅訶三藐三
 佛陀と名レキ

○ 過去（に）佛有（しき）名をば雲電音王ト申キ 多

陀阿伽度とも阿羅訶とも三藐三佛陀（と）も

以上の事實から、平安時代初期の明詮僧都の朱点では「
 名ラバートイフ」と反覆形によんでいたのが、後期の
 珣照聖人の訓になると「ト名ツク」と単純に一回よ

む型に変化したことが判ると思う。

ついでにいうならば、高野山龍光院妙法蓮華經では「
 名」の文は已に「ト名ツク」となっているのは、
 以下の例に示すとおりである。（これは、前出の例(5)か
 ら(2)まで及び例(39)から(55)までと同一箇所である。）

(56) 諸の菩薩の爲に大乘經の無量義教菩薩云佛所護念と名
 （る）を説（きたま）ひき

(57) 介（の）時（に）佛有す、日月燈明如來と應供と正徧
 知と明行足と善逝と世間解と無上士と調御丈夫と天人
 師と佛世尊と号（し）き

(58) 佛有して人中の尊なりき 日月燈明と号（し）き

(59) 時に佛大乘經の無量義と名（る）を説（きたま）ひて

(60) 跌を蹴て三昧の無量義處と名る（に）座（したま）ひ
 き

(61) 介（の）時（に）菩薩摩訶薩有（り）大乘說と名（く）

(62) 此に菩薩の文殊師利と名（る）有（り）

(63) 一切衆生喜見如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士
 調御丈夫天人師佛世尊と号（せ）む

(64) 亦威音王如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御

丈夫天人師佛世尊と号(しき)

(65) 今(の)時(に)一の菩薩の比丘有(り)て常不輕と

名(け)き

(66) 乃往過去の無量恒河沙劫に佛有(し)き日月淨明德

如來應供正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人

師佛世尊と号(し)き

(67) 是の數を過(き)已て世界有(り)淨光莊嚴と名(く)

(68) 其(の)國に佛有(し)て淨華指王智如來應供正徧

知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と号

く

(69) 過去に佛有(ま)しき雲電音王多陀阿加度阿羅訶三藐三佛

陀と名(け)き

さらに、前にあげた西大寺本金光明最勝王經の諸例を、
同じ本の永長二年朱点ではどのようによんでいるか調査
するに、小さな写真であまりはつきりしないが、大部分
は返読符号がついていることに気がつく。私の見たかぎ
りでは、(23)の例は、どうよんだか判らないし、(24)、(25)は「

ト」の点と句点があるが、それ以外の例はすべて返点が
あり、下から返読して「ト名ツク」とよんだのだろ
う。用例は紙數の都合で省略する。

(五) 訓法の変化の理由

以上これまでの諸例から、次のような事実が明らかになつた。

(1) 原漢文の「名」。・「号」。・「トイフ」。・「トイフ」。
場合、古く平安時代初期には「名ヲバートイフ」。
「号ヲバートイフ」という具合に、まず「名」字
を「名ヲバ」・「号ヲバ」・「名ヅケテ」等とよみ、
次に仏の称号等をつらね、最後に「トイフ」をよみ、
そして反覆形でよんでいた。

(2) 時代が下ると、このような丁寧なよみかたは行われ
なくなつて、「名」字を下から上に返読して「ト
ト名ツク」という單純なよみかたに変わった。

以上である。

それでは、右のような訓読上の大きな変化は、はたし

てどのような原因によるものであるうか。初斯訓詁文の時質および変化全般については、種々の条件を考えて総合的に検討する必要がある、別稿でまとめるのであるが、「名」字の問題については私は以下のような理由を特に重視したいと思う。

第一には、同じ漢訳仏典内における、「名」・「号」の文とほぼ同様な意味を表わす他の原漢文の書き表わしかた、の影響である。そもそも訓詁というものが、基になる漢文がある以上、原漢文の書きかたの影響・制約を受けるのは当然であろう。さて原漢文では「名」・「号」と似た文として、(A)「名曰」・(B)「号曰」・(C)「名爲」・(D)「長名」・(E)「号名曰」・(F)「是名爲」・(G)「号曰爲」等、調べてみるとさまざまな書き方がある。意味の上からは、(D)・(E)・(F)・(G)の例は「命名する」という意があるいは若干感じられるかもしれないが、(A)・(B)・(C)は時にそのようにも思えない。次に、右の(A)・(B)・(C)に相当する諸例を、西大寺本最勝王經から示す。(これは、用例(22)から(33)までとほぼ

似かよった意味で用いられているので、くらべて検討する必要がある。)

(70) 當に佛と作(る)こと得む。号をば「曰」金光明といはむ。如來應正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊といはむ 172 ペ

當得作佛号曰金光明如來應正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊

(71) 當に佛と作(る)こと得む。名をば「曰」金幢光といはむ。如來應正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊といはむ。 172 ペ

當得作佛名曰金幢光如來應正徧知明行足善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊

(72) 陀羅尼有り、名を「曰」金勝といふ。 83 ペ
有陀羅尼名曰金勝

(73) 是の故に二地を名(づけ)て「爲」無垢といふ。 148 ペ
是故二地名爲無垢
(74) 城を去レルこと遠(から)す「不」して國有り、名をば「妙花福光」といふ。

去城不遠有園名曰妙花福光

(75) 介時に佛有して〔於〕世に出現〔し〕たまへりキ。名

をば〔曰〕寶警とまをしキ。

174

介時佛出現於世名曰寶警

(76) 阿難陀過去の世の時に、一の國王、名をば大車と

曰ふが巨に富〔み〕て財多〔く〕して、

175

阿難陀過去世時有一國王名曰大車巨富多財

さて、右の(A)「号曰」。・(B)「名曰」。・(C)「名爲」。

「の諸例を、これまでの「名」。・「号」。の例と比較してみよう。そうすると、右の(A)・(B)・(C)の例の方

が、語を全然省略していない正しい書きかたと我々には思えるのであるが、平安時代初期の人々も同じように考えたのではなからうか。しかも、この(A)・(B)・(C)の書きかたの方が経文の原漢文でははるかに多く用いられていたのである。だから、(A)・(B)・(C)のような漢文の書きかたの意識が常に当時の人々の頭につよくあったので、「名曰」。等を逐字的によむ結果、習慣的に成立した「名ラバー・トイフ」。呼称関係のよみかたが、「名」。の

場合にも自然と現われたのではなからうか。

第二として、初期訓練の話しことば的な面も、理由の一つに考えられると思う。周知のように、初期の訓練は多くは講義あるいは演説のようなやりかたで行われたもののである。したがって、初期の訓練に用いられた語や文の中には、話しことば的な要素もかなり混っていたと見ることができる。今、問題になっている「名」。・「号」。という文では、「」の部分は一一般に補語といわれているものである。もし、この文を現在の漢文訓読において行われているように、補語を先によんでそれから上の「名」を返読して「ト名ツク」とよむとすると、上から文章が続いてきている場合に、補語が一本どこから始まったものか理解するのに大変困難で、文意をとりちがえるおそれが多分にある。しかも、それが初期の訓読におけるように、主として耳で聞くことの多いことばであり、補語の非常に長いものがしばしば現われるからにはなおさうのことである。以上のような危険をさけるために、初期の訓読ではまず「名ラバ」とよみ、

長大な補語のくることをあらかじめ示し、最後に「トイ
フ」で結んで補語の終わったことをはっきりと確認させ
て、無駄な誤解のはいりこむ余地を防いだのではあるま
いか。つまり、最初の「名ヲバ」は会話文のはじめに用
いられる「にあたり、下の「トイフ」は会話文のおわり
のしにあたるものともいえよう。

なお、西大寺本最勝王經の諸例について説明を補なう
ならば、先にあげた「名ヲバ」「トイフ」の諸例(22)から
(33)までのすべてが、いわゆる「し」でくられる節分であ
ることも、これがまったく偶然の一致であるとはかりも
思えず、話しことばと何らかの関係があることを暗示し
ているように私には思われる。

ところで、時代が下ると、已に今まで先学諸氏によっ
てのべられたように、初期点本の日本語としても不自然
でない丁寧な意訳の訓法は次第に行われなくなり、原葉
文の文字を機械的に直訳してよむようになった。

その結果、「名ー」の文は「名曰ー」などどちがって、
下から上に返読されるだけの簡単な訓法になってしまっ

たのである。

註1. 研究の意義・資料・方法等については拙稿「漢文訓
詠史上の一問題(一)」「(六)」(訓点語と訓点資料才八輯
以降)参照。

註2. 春日政治「西大寺本金光明最勝王經古点の國語学的
研究」298ページ、299ページ。

註3. 平樂寺書店「訓譯法華經并開結」による。なお、用
例番号(5)」「(21)」の例は(四)にあげる平安時代初期点本の
諸例と同一箇所である。訓法の異同を比較検討する
必要がある。

註4. 註1の拙稿参照。

註5. 解説文が已に公表された初期点本資料の分量は、決
して多くはない。これだけの調査では、勿論充分と
はいえないが、全十巻から全用例を調査したので、
結論の大勢にはどれ程影響がないと思う。

なお、このような例は非常に多いという訳ではない。

最勝王經全十巻を通じて以上に示したのが全部である。だから、「名」の文をいつも必ずこのようによむというでもない。ただし、このようなよみかたの傾向は以上および以下の例に示すとおり、明らかに認められる。

註6. 中田祝夫博士の学会発表プリントによる。

註7. 註1の拙稿参照

〔追記〕

「名」という文の訓読について、直接意見をのべた人はこれまでにないが、春日政右博士は「西大寺本金光明最勝王經古点の國語学的研究」^P44で「有」名曰の文について、

次に譯方の定型についてであるが、同一結構の原文は同一様式に譯方が固定してゐるかと思つて、必ずしもさうではない。一例ではあるが、

余時に王舍大城に一（はしら）の菩薩摩訶薩の、名を妙幢と曰ふ有す。 六ノ九

過去に王有（リ）キ。金龍王と名つキ。 七九一五

善男子、毘羅尼有リ、名を（曰）金勝といふ。ハ三ノ二

汝等知る當し、有（す）毘羅尼を名（づけ）て如意寶珠

といふ。 一二四ノ六

〔於〕此ヨリ東方に光明雷王有リ。阿闍多と名（づ）

ク。 一二四ノ二

右の数例は、原文に於ける「有」「名」「曰」もあつて

の三字が同一位置にある同結構の文であるのに、訓譯

の文に於て、この三語の所在が種々雑多であるのを見て、如何に譯方が多種であるかを知るのであらう（傍線

門前）

とのべられた。また、中田祝夫博士も昭和女子大で、（

昭和37・11・10）註6のプリントを材料にして、春日博

士の説をうけて初期の訓法が一定してゐないことの一例

として説明されたように記憶する。しかし、本稿にのべ

たことと反覆形という見地から改たためて見なおせば、前

述の如く反覆をする傾向があるといえると思う。

〔追記 2〕

- (三)で地藏十輪經の用例をあげたが、中田祝夫博士「古点本の國語学的研究譯之篇」の十輪經の譯文中、後述の平安時代後期の点本との比較上、巻四に限ってこれ以外に用例を補なうと、(三)の(35)・(37)・(38)以外にも、
- (77) 王の號をば勝軍といひき。
- (78) 時に彼に一の大なる丘、廣ノ所有(り)き、名は竭藍婆といひ(き)。
- (79) 諸の人還り已(り)て(於)夜分に至(り)て、大羅刹の母有り。名はカ^カ劍^カ眼^カといふ。
- (80) 介(の)時、復、大羅刹(の)母有(り)。名は驢^ロ驪^ロといふ。
- (81) 又、善男子、昔、國王有(り)き。名を趣福徳といふ。となる。以上の巻四の用例の(35) (37) (38) 及び (77) (78) (79) (80) (81) を架藏地藏十輪經巻四平安時代後期点とくらべると、

(35') 善男子、乃往過去に迦奢國の王有(し)き。梵授と名

(け)き。海茶羅に勅(して)、大衆王有里、青蓮目

と名(つ)く

(37') 介時、復、大羅刹母有(り)。驢驪と名(つ)く。

(38') 介時、復、大羅刹母有(り)。刀劍口(と)名(つ)く。

(77') 王をば勝軍と号(し)き

(78') 時に彼に、一の大丘壙の所有(り)き。竭藍婆と名

(け)き。

(79') (於)夜分に至(り)て、大羅刹の母有(り)。刀劍眼と名

く。

(80') 介時、復、大羅刹母有(り)。驢驪と名(つ)く。

(81') 又、善男子、昔國王有(り)。趣福徳と名(け)き。

となり、これによっても反覆形から反覆形への変化が判る。

(昭 34・12・15 稿
昭 40・5・5 補)